

『また…来たんですか…?』

ノックもなしに私の部屋にずかずかと男は入ってきた
こちらの都合もお構いなしな無遠慮な態度…
本来なら怒りたいところですが私は何も言えず
この人を招き入れることしかできずにいた



なぜなら…この人は私の秘密を知っているからだ…

ダヴィンチちゃんも欺けていたと思っていたが…
実際はこの人にバレており情報の隠匿をしてもらっていた
私がレイシフト中に自由に行動できていたのは
この人のお陰だったのだ…



「魔力供給なら…口でっ…」

「いつ回答をしいいいった？」

「ですがっ…今日、このあと先輩とっ…」

「なんだ？」

あのへばマスターにお前の本当の姿でも
見てもらいたくなかったか？」

「っ!？」

んっっ

「こっちはるくに魔力供給もできない
マスターの代わりにこうやって毎日
魔力を提供しにきてやってるんだ」

「くっ…」

「だから黙って股開いてればいいんだよ
この変態サーヴァントが!」

ズ
ン
ッ



すいません先輩…

先輩の悪口を言われても反論もできず
さらにはおまんこでの魔力供給まで許してしまいました…

先輩にはどうしてもあの記録を見られたくなくて…

この人に逆らうことができなくなってしまった
私をどうか許してください…

ですがどんなことをされても
私は先輩のサーヴァントです…
こんな魔力供給…すぐに終わらせて
また先輩と…



「っ♡♡♡♡♡」

「どうした？腰が止まってるぞ
魔力が欲しかったらこうやって腰を使うんだよ
何度も教えただろうが」

ふっ…深いっ♡
奥までおちんぽがっ…♡
私の弱いところ…擦ってきてっ♡
だめっ♡声が…勝手にでちやうっ♡

あーっ

あーっ

「あっ♡あひっ♡
だめっ…は、はげしっ♡♡♡」

「お前だけ気持ちよくなってるどうすんだ？
魔力供給のためにまんこ使ってるやっつてんだ
もっと俺を気持ちよくさせるんだよ！」

だめっ♡気持ちよくなっちゃだめなのにつ♡
私の弱い場所っ♡知られてるからっ♡
これ以上責められたらおかしくなっちゃうっ♡

先輩っ♡先輩っ♡先輩っ♡このままじゃわたしっ…♡

ズ
ン

「くっ…射精^でるっ！」

「おっ♡♡♡ほおおっ♡♡♡」

あっ♡ああっ♡

なかっ…子宮に直接魔力が注がれてる♡

気持ちよすぎてっ♡体がっ…♡♡♡

だめっ…もっと♡もっと欲しくなっちゃうっ♡♡

ズン♡

おっ♡♡

「へっ…一度中に射精^だしちゃえば

従順なオナホに早変わりだな

今日はたっぷりまんこ使ってやるから覚悟しとけよ」

ドクドク

今日っ…今日はこの後、先輩の部屋に行く予定がっ…
でもっ…私はこの人に逆らえないからっ♡

ごめんなさい先輩っ♡

今日は一日中この人におまんこを

使ってもらうことになっちゃいましたっ♡♡♡

あれから数時間…

もうすぐ先輩との約束の時間がっ♡
せめてっ♡連絡を♡♡

「先輩っ♡…先輩との約束がっ…♡」

くっくっ

くっく

くっく

くっく

「あ？なんだって？
もうイキそうだからまんこ締める
なかに子宮に射精す」

「おっ♡おぉおっ♡」

「あぁっ…射精^でるっ…
娯楽がすくねえから丁度いい
オナホが手に入ってホント助かったぜ」

子宮^{なか}につ…♡射精^だされてるっ♡♡
文献では知っていましたが♡
これ程までっ…♡気持ちいいもの^はだとはっ♡
こんなの知ってしまったらっ♡
もう…他のことは考えられなくなるっ♡♡

イクっ♡

ドクドク

イク

「おらっ！さっきなんか言ってたな？
聞いてやるから言ってみろ！」

「あっ♡あぁっ…♡
なっ…なんでもっ♡なんでもありませんっ♡♡」



「へっ...そうかい...それじゃあ続きといこうか...」

あーっ

あーっ

あーっ

おっ

あーっ

あーっ





















































